
戦神の目付け役

とんがり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦神の目付け役

【Nコード】

N0850BA

【作者名】

とんがり

【あらすじ】

誰よりも男らしく、頑固で、気が強い皇女。『戦神』と呼ばれた彼女の性格を矯正する為に目付け役として雇われたのは、女好きの剣士であった。王位継承問題を巡り、彼女が何かを得ていくお話。

国王の悩み

「ふむ、由々しき問題であるなあ」

王は憂いていた。

王は、面倒な事になるといつも口髭をなでつける。

今回の彼の癖は、最多記録をぶつちぎりで更新していた。

しかし、言葉とは裏腹に声音はどこか間が抜けている。

困った顔を見せてはいるが、重要さは微塵も感じられない。

王の嘆きは、周りの臣下はおるか実の子供たちでさえも呆れさせていた。

「……陛下、宜しいですか」

最初に先陣を切ったのは、第一皇子であるギルベルトだった。

苛立ちを幾分か含んだその声音に、臣下はびくりと体を強張らせる。

熊のような長身と体躯、無愛想で鋭い眼光を兼ねそろえたギルベルトは、

ただでさえ普段から怯えられている。

それに加えて短気で厳格とくれば、周囲の者は皆行動の二つ二つに気にかけるのだ。

「うん、何だギルベルト」

「先ほどからもう二十数回その言葉を仰っております、陛下」

「うむ、そうなんだなあ」

「……用があつて、我々を呼んだのではないのですか」

ギルベルトの眼光が更に鋭く強くなる。

父とはいえ、一国の主に対しての度胸は兄弟中の1・2を争う程

である。

いかにも怒りを吐き出しそうなギルベルトを、隣にいた男が慌てて止めた。

「ま、まあ落ち着いてくださいギルベルト。陛下の心中も察してあげなくては」

苦笑しつつ、苛立つギルベルトをなだめる。

穏やかな容貌のこの男は、第二皇子ギリアン。

母親似の見目麗しい顔立ちと、勤勉家で頭が恐ろしいほどよく切れる。

温厚な性格も相まって、貴族や平民の女性達には人気が高い。強面であるギルベルトと比べられるのだから、尚更であるが。

「陛下、憂う心中お察し致します。ですが、そろそろ我々が呼ばれた理由を教えてくださいだきたいのです」

「呼んだ理由、なあ……そうだなあ」

またぼんやりと、寝言の様に呟く。

口ひげを撫で、眉を顰め、深く重くため息。

ギルベルトはこめかみに青筋をたて、ギリアンはそれを見ておろおろとし始めた。

臣下や宰相、近衛隊長までもがいつギルベルトが啖呵を切らないかはらはらしている。

ああわが王よ、早く仰ってください……

誰もが祈りを捧げようとしたその時、突然謁見の間の観音扉が開かれた。

「ダウル陛下！ご報告いたします！」

観音扉にいたのは、第一皇女ゲオルギーネの従者だった。

走ってきたのか、はあはあと息遣いを荒くし必死に息を整えている。

途端にギルベルトの我慢の尾が、勢いよくブチ切れる。

「貴様！！陛下の御前だと言うのがわからないのか！！」

慟哭にも似た怒号が、謁見の間に響き渡る。

びりびりと震える空気に、従者も顔面蒼白になってしまった。

「あ、あの……」

「良い、早く報告しろ」

予想外のダウル国王の発言に、皆驚いた顔で振り返る。

当の本人は、何かを待ちわびた顔で従者の言葉を待っている。

嬉しそうな、悲しそうな複雑な顔である。

「そ、それでは報告致します！」

息を整え、従者はギルベルトに負けない位に声を張り上げた。

どれほど深刻なのだろうか、皇子達も臣下もごくりと喉を鳴らす。

「無事、ゲオルギーネ様とヨシユア皇子とのご婚約が成立なされました！五日後、ゲオルギーネ様はリンベルン王国へ出立……」

「やはりそうなってしまったかあああああ！！！！私の可愛いゲオルギーネえ！！」

従者が言い終える前に、国王は顔を覆って泣きむせぶ。

子供の様にわんわんと泣き喚いた声に、皆違った反応を見せた。

ぽかんと口をあける臣下、またかと呆れる皇子、ドン引きしている宰相。

ゲオルギーネが婚約。

ダウル国王の愛娘であるゲオルギーネ。

彼女が生まれてから二十数年、国王は他の皇子皇女よりも数倍の愛情を与えていた。

最初に生まれた皇女だったり、彫刻の様に美しい容姿をしているだったりするのだが、

何よりもダウルが喜んだのはおしとやかで繊細な彼女の性格であった。

『私はずっとこの国にいて、陛下のお役にたつてみせますわ』
そう言ってくれた時のダウルの喜びようは、目も当てられなかった。

が、その数年後彼女は異国の皇子と恋におち、婚約してしまう。
外交問題としては申し分ないのだが、父親としては納得できなかった。

「……兄上、ギリアン兄上」

おいおい泣いているダウルをよそに、ギリアンの背中をつつく青年がいた。

第三皇子、ガリオン。

まだあどけなさ残る甘い容姿に惹かれる者は多い。
が、それも幻想だと気づくのは早い。

「陛下、何であそこまで馬鹿みたいに泣いているんですか。たかが婚約で」

「……ガリオン、少し声を抑えなさい。それに、馬鹿なんていつてはいけないよ」

優しくたしなめるが、詰まらなさそうにガリオンはふんと鼻を鳴らす。

毒舌家、いやむしろ悪がきと言った方が正しい。

大衆でもお構いなく毒舌をかます、この皇子に泣かされた臣下は数知れないのだ。

「ゲオルギーネはね、国王候補だったんですよ」

「はあ！？女王政権って事！？」

「ええ、陛下の溺愛っぷりから見ればそうなるでしょう」

納得がいかないのか、嫌そうに顔を歪めるガリオン。

今は国王の喚きで声が聞こえていないが、そろそろ声を落としてほしいところである。

「ですが、婚約をしてしまい状況は変わったのです。相手の国のリンベルンは、是非ゲオルギーネをこちらに寄越せと言ってきたので……」

「よく許したんだね、あの陛下が」

「政治も関わってきますからね、何せリンベルンは鉱山が豊富で漁業が盛んな大国。ここで下手な真似をすれば、輸出入に置いて大損害を受けてしまいます」

「あー、だからかあ」

「父親の前に一国の主ですからね、陛下は泣く泣く婚約を承諾したでしょう……」

ちらりとダウルを見やると、ようやく落ち着いたのか泣き止んでいた。

が、子供みたいにしゃくりあげ鼻をすする姿に「気持ち悪」とガリオンがひっそり毒づく。

「……ああ、こうなることは分かっていた。愛しのゲオルギーネがリンベルンへ行ってしまう事など」

「はあ」

気のない返事をしたのはギルベルトだった。
心底どうでも良い、といった顔をしている。

「王位継承問題だってそうだ、もう良い白紙に戻そう。私は視野が狭かったのだ、ゲオルギーネにだけ負担を残す事などなかったのだ」

ぶつぶつと呟いているダウル国王に、ギルベルトとガリオンは密かに苛立っていた。

ほかの子供たちなら良いのかよ。

「ギルベルト、ギリアン、ガリオン。お前たちは、玉座につく覚悟はあるか」

涙を拭いながら、ダウルは問いかける。

正当に行けば、引き継ぐのは長子のギルベルトだ。

だが、白紙に戻すとはどういう事だろうか。

「私は家柄や血筋や形式に拘るのは好きではない、個々の人間の能力で見極めたいと思っていた。……ゲオルギーネは最たるものだったが」

余計なひと言だったが、脱線しそうだったので誰も突っ込まなかった。

「つまり、ギリアンやガリオン、後の皇女二人にも継承権があるという事。なんでもいい、国王になりたいと思うならばそれなりの働きを見せよ」

王位継承権。

やっと真面目な話題になったかと思えば、重大すぎやしないか。まだ余命もありピンピンしている国王は、どうやら王位継承問題を長く続けていく気らしい。

誰が国王になるかは、ダウル次第である。

精々頑張って期限もわからぬ継承問題を、続けろという事なのだ。

「ほ、本気ですか陛下。乱心ではございませんね」

「当たり前だ！私はもう決めたのだ！揺るがんぞ！」

さすが気まぐれ王と名高いダウル国王、全然予想がつかなかった。動揺があからさまに周りに広がっていく。

無理もない、臣下の中にはどの皇子皇女にはなってほしくないと

いう願いを持つ者だっているのだから。

派閥争いとまではいかないが、ガリオンを国王にしたくない臣下はいる事は確かである。

ほぼ彼に泣かされた人間ばかりだったが。

「……と、いう事はガルシアも、ですか」

ギリアンの言葉に、皆がぴたりと行動を止めた。

不機嫌そうなガリオンの表情が、より一層歪んでいく。

「ああ、あの『戦神』と名高いガルシアもね。うわあ、俺絶対嫌だね」

「ガリオン、やめなさ……」

「ガルシア……ガルシアな、お前たちを呼んだ理由はそれだ……」
うわごとの様な国王の言葉に、たしなめようとしたギリアンが言葉をつぐむ。

明らかに疲れた表情を見せ、頭を押さえた。

国王の悩みの種は……自ずと想像できる。

「皆も知ってるであろう……、ガルシアの……あの娘の性格を」

「ただ今狩猟より帰って参りました、陛下。それと、兄上方も」

凜とした強い声。

狩猟用のベストとパンツにブーツを履き、肩に猟銃を背負う人物が扉の前にいた。

黄金色に輝く美しい金髪は、高く一つにまとめている。

と、いつでもそこまで長くはないので、動物のしっぽの様になってしまっている。

白い素肌に、切れ長の瞳、ずっと高く伸びた鼻と、中性的な容姿がその人物を男らしく見せた。

悠々と歩く姿は、軍隊の様である。
そう、『彼女』こそが悩みの種であり、王家一番の度胸を持つ人物。

「……ガルシア、よく、戻ってきた。……そんな男らしい格好で、あからさまな王の落胆の声がした。」

国王の悩み（後書き）

また始めました
↑

いやああけておめでとうございます！

きりがいいので、新作をあげてしまいました。^^

い、いやあ悪い癖悪い癖……

今回はどっしり厚みのある作品をかくつもりなので、
頑張っていきたいと思います！

まだ主人公がちゃんとでていないですが笑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0850ba/>

戦神の目付け役

2012年1月1日23時48分発行